

# 松山幸生先生講述・第1回

## 「ヘブライ人への手紙に学ぶ」まえがき

これまでの旧約聖書の学びを踏まえ、新約聖書の学びに進むにあたり、旧約新約の架け的な役割を担う文書として、この「ヘブライ人への手紙」を取り上げました。

日頃、教会の説教テキストとして用いられることの少ない、ある意味、難解な書簡ではありますが、信仰の養いに重要な文書であると共に、初代教会の諸事情について関心をお持ちの方々や、キリスト教とユダヤ教との関わり方について興味を持たれる方々にも、この文書の学びがお役に立てるのではないかと期待致しております。

この手紙は、ユダヤ教の歴史と伝統に育まれた人々に宛てて記されています。言い換えれば、神に対する旧約的基礎知識を持った人々に対して、この新約書簡は書かれているのです。

これまで私たちは、主イエス降臨以前の人々が、どのように神の求められる信仰を受けとめ、どのように生き、どのように神の御言と関わってきたのかを学び知る上で、主の豊かな御導きの恵みに与ってまいりました。こうした観点を更に継承し、各人の信仰の確立のためにも、より直接的な現実の課題の中で、聖書に深く聴くことを目指して、これからの学びを進めていくことが肝要であると考えています。

時は、まさに21世紀の幕開けにあたり、「私共の人生において、御子イエス・キリスト、そして、その御方の十字架刑はいかなる意味を有するのか」、また「私共の日常生活において、礼拝を献げるとはいかなることなのか」という信仰の本質を、共に学んでゆきたいと願っております。

20世紀末の世界に吹き荒れた混迷と騒乱は、「神を神と認めようとしなさい」人間中心の文化が到達した負のイデオロギーであったとも言えるのではないのでしょうか。しかしながら、激しい歴史の変動、経済の濁流化の中でも目標を見失うことなく、他者の人格と尊厳を認めつつ確かに生きる道が、聖書の中には秘められております。

この序文（まえがき）は2001年1月、この著書の出版に合わせて書かれたものです。内容が凝縮しており、時には難しい表現になっておられますが、松山幸生先生は、常に聖書を現代に生きる我々に実存的に語られ、主に呼び戻される実感を醸します。

「ハイデルベルグ・カテキズム」は、その第1問において「生きている時も、死ぬ時も、あなたの唯一の慰めはなんですか」と問うています。私共は、この問答書が問うて来る迫りに、全存在をかけて

「私が生きている時も死ぬ時も、身も魂も私のものではなく、私の真実なる救い主イエス・キリストのものであることとあります。」と答え切れた時、主イエスの信仰に生きる者とされている確信に立っている、と言えるでしょう。

これからの学びも、主の十字架と御復活によってもたらされた、全き赦しの時、それに伴う神の忍耐に与る時を生きる者として、それぞれ共通の地盤に立って記された「新約聖書」の数々の御言葉をも参照しつつ進めていきたいと存じます。

そこで、エルサレム神殿崩壊後の80年～90年当時、ローマ帝国と同邦人からの迫害という内外両面からの脅威に晒されていたディアスポラ（異邦の地へと離散したユダヤ人）に宛てて書かれた「ヘブライ人への手紙」を共に紐解きますと、そこに展開されている生々しい現実との闘いの中で、旧約聖書の知識（幕屋・祭司・犠牲・契約等に関する知識）に通じ、また、その登場人物についても詳しく知っていたユダヤ人のキリスト教改宗者たちが、様々な異なった教えに翻弄され、贖い主キリストがもたらされた終末論における確信を失いかけていたことが分かります。

この手紙によって、それらの人々に与えられた勧告と慰め、叱責と励ましの言葉を、私共も真摯にお聴きすることにより、私共の拠って立つべき信仰の根幹が何であるかを、再認識していきたいと存じます。

この手紙においては、キリスト論（イエスこそ救い主メシアであることを示す神学的論証）が鋭く簡潔な言葉で述べられており、「神が、絶えざる営みとして人間に語りかけ続けられている歴史」として「時：カイロス」を捉え、その終末に向けての備えを促しております。この手紙の学びを通して、「何が正統的な信仰であるのか、何が主を蔑（なみ）することなのか」を、しっかりと捉えて、揺るぎない信仰生活への指標とすることができればと願っております。

聖書は日本聖書協会刊の「新共同訳、旧新約聖書・続編」を用いました。

## <写者あとがき>

「ヘブライ人への手紙」が、旧約聖書から新約聖書の学びに進む架け橋的な役割を担うのは、主イエスの降臨以前の人々が、どのように信仰を受けとめ、どのように生き、どのように神の御言と関わってきたかを知ることができるからです。

更に、当時、異邦のローマ人や、同邦のユダヤ人による、外側からの脅威や迫害に晒されていたディアスポラのユダヤ人キリスト者たちが、内側の現実との戦いの中でも、様々な異なる教えに翻弄されて失いかけていた信仰の確信を、回復してゆく過程を知ることができます。このことは、今を生きる私たちが、著しい世俗化の波が打ち寄せる中でも、如何にして信仰を貫いていけるか、また、失いかけた信仰を如何に立て直すことが出来るかを学べて、大いなる励ましと勇気づけに与ることができます。

この手紙の②節後半からを聖書協会共同訳で読んでみますと、キリスト論の本筋が簡潔に記され、私たちが希望する、ないしは、目指すべきところが明確になってまいります。

神は、御子を、1) 万物の相続者と定め、また御子を通して 2) 世界を作られました。

御子は3) 神の栄光の輝きであり、4) 神の本質の現れであって、5) 万物をその力ある言葉によって支えておられます。そして、6) 罪の清めを成し遂げて、7) 天の高いところにおられる大いなる方の右の座に着かれました。

ハイデルベルグ・カテキズムは、その第1問において「生きている時も、死ぬ時も、あなたの唯一の慰めはなんですか」と問うています。私共はこの問いかけの迫りに対して、全存在をかけて「私が、身も魂も、生きている時も、死ぬ時も、私のものではなく、私の真実なる救い主イエス・キリストのものであることでもあります」と答え切れるように、信仰を養って行かねばならないことを、痛切に思い知らされます。そのためにも、この手紙の学びが意義深いものとなることを、大いに期待しております。

(2024年8月11日 小原記)

## 第1回 終わりの時には御子によって語られた。

### 第1章①節から④節 神は御子によって語られた

- ①神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、
- ②この終わりの時代には、御子によって私たちに語られました。神は、この御子を万物の相続者と定め、また、御子によって世界を創造されました。
- ③御子は、神の栄光の反映であり、神の本質の完全な現れであって、万物を御自分の力ある言葉によって支えておられますが、人々の罪を清められた後、天の高い所におられる大いなる方の右の座にお着きになりました。
- ④御子は、天使たちより優れた者となりました。天使たちの名より優れた名を受け継がれたからです。

#### <神の先在性>

1章①節から④節はプロローグとも言われるところです。

まず、この「ヘブライ人への手紙」という表題ですが「これは本当に手紙なのか」ということは、古くから議論されているところです。

挨拶の言葉もない、誰に送られたのかも、著者が誰かも書かれていない——、終わりの方で多少手紙らしい体裁が整えられていますが——前の方は全く手紙としての様相はないのです。そういう意味では、これは手紙ではなかろうという見解もありました。また、著者は誰だろう、ということで、色々な人名も挙がりました。

しかし私たちは、誰が書いたのかとか、果たして手紙だったのかどうかと云うことよりも、ここで何が語られているのか、御霊によって導かれた人が、ここで何を私たちに伝えようとしているのか、などにウェイトを置いて聴いてゆくべきではないかと考えます。文学批判的な、あるいは聖書の原典論的な考察をなすのではなく、与えられた御言葉に対して誠実に集中して学んでいきたいと願うのです。

先ず、この①節から④節までには、「大きな前提」が一つあります。

それは、「神は、被造物に対し絶えず語りかけ続けておられる御方である。ゆえに、神は、被造物である私たちにとって、語りかけてくださる存在なのだ」ということです。

これを、私共の国で広まっている各種の宗教と比較してみますと、非常に顕著な違いがあるのです。「人間は、神に対してねぎごと（願い事）があるから神に近づき、感謝したい出来事があったから神に近づき、神から何か与えられたいものがあるから神に近づく」という形で、一般の宗教は成り立って来ています。

ですから、語りの先行は私たち人間なのです。人間がもの申して、神がそれに応えてくださる。その応え方が人間の願い事に適っていたり、頼んでいる方向に向くと、この神は本物だという評価を下す。言い換えると、神が最初にあるのではなく、人間が先あって、その人間の自己都合の願いや要求が先にあり、それに対してうまく焦点を合わせて応答してくれる神がいるのを認めた場合に、初めて「私は神を得たから、それを拝む」という言い方をするわけです。

そのような国に生まれ育っていますから、下手をすると私たちも、信仰とはそんなものだろうとか、結局私の願いにどれだけ応えてくれるかが、神が神であるかどうかを決めるポイントだろうとか、こんなに一生懸命信仰しているのに、よいことがちっとも与えられないなんて、神はいったい何をしているのだろう、という言い方をしてしまいがちです。

このような信仰観、宗教観と言うものを持っている私たち人間にとって、この手紙は正面から「あなた方のそういう発想を180度変えなさい」と命じているのです。神が先におられたのです。その動かし難い「神の先在性」が非常に強く訴えられています。

「最初に在られたのは神なのだ、そしてその御方がおいでにならなかつたら一切のことが始まらなかった。神はおられたのだ。」というところから出発するわけです。ですから、この手紙を読みながら「神の臨在は果たして本当なのだろうか？」と問おうとしてもこの手紙は答えてくれない。なぜなら「原初に神がおられた。そこからすべてが始まったのだ。」という形で語り始めるわけですから、このことに疑問を持つような人間は全く念頭に入れない形で、この手紙は書かれているのです。

しかし、ここで、この手紙を学ぼうとしている、その背景にあるのは何かと言いますと「私たちの信仰とは何なのか」をもう一度確認しておきたいということがあるのです。ですから、まず、「私たちが信仰と考えているもの、私たちが信じている前提に立っているものは何なのか」を明確にすることが肝心だと考え、その上で、もう一度ヘブライ人への手紙を丁寧に読み直すことが大切なのだ、と考えたわけです。

## <神は語り続けておられる>

### ①節

神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、

これは「ヘブライ人への手紙」がまず私たちに伝えたい第一のメッセージですね。

「神は語り続けられた、たとえ私たちの先祖が聴く耳を持たなくても語り続けられた。」そして、神が一方的に語っておられるのを、私たちが受けとめられる背景を無くしてしまったときには、形を変えてでも、神は語り続けられた。言い換えれば、何としてでも、その心の耳に届かせようとして「神は語り続けられた」のだと言うことを、ここでまず明らかにするのです。

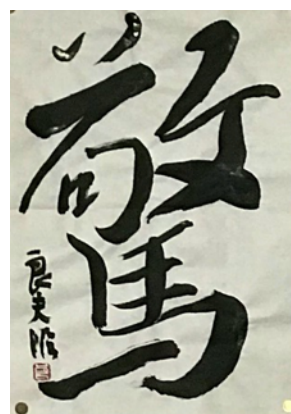
「神が語り続けられた」というこのメッセージは同時に、神はそれゆえに「唯一の真実なる御方」であられ、「この御方以外には、私たちが私たちとして捉えてくださる御方はいない」という信仰告白が、この言葉の背景にははっきりとあるのです。

「かつて」という言葉で著者が括っているのは、創世記の初めから、この手紙の時代に至るまで、継続的に、神が預言者を通して語り続けられたのが、実は、旧約聖書だったということです。

神が先ず混沌に向かって告げられたのが「光あれ」という御言で、そこから事が起こって来る。神の呼びかけによって全てが始まったというのが、聖書の世界なのです。そして、そこには元々光が存在し、創造の御業が進み、最後に人間が創られた。その人間には、神の御言に従って生きることが求められ、更に神から、神のあらゆる被造物に命名することが求められた。しかし、命名者とされた人間は、やがて、自分も創造主であられる神のようになりたいと願うようになる。創世記3章はそういう人間の罪の姿を描き出すのです。

## <荒野に立ち返る信仰>

聖書が私たちに告げるメッセージの99%は「神はあなたを愛し、すべての期待をかけておられる。しかし、あなたは神の御言に聞こうとはしないで、殆ど自分の意思に従って生きていきたいと願っている。それゆえ、神の御言に背を向ける度に、あなた方は神によって艱難に出遭い、祝福から遠ざけられ、様々のいたずきを担うこととなる。もしあなたが今、いたずきを担い、混乱の中にあり、幸を感じない状況だとすれば、それは、神との関係から自ら遠ざかっているからである。」という語りかけをするのです。



松山先生の書齋中央にある書

エデンの園にいた人間、整えられた恵みの中にいた人間アダムは、神の恵みに感謝するのではなく、自分をもっと神のように賢くなりたいと考えた。それゆえ、神に禁じられていた「善悪の知識の木の実」を食べてしまう。その後、様々な歴史物語を経て、アダムの子孫イスラエルはエジプトで奴隷となった。そしてそこからイスラエルは、神の御言に従うモーセに率いられてエ

ジプトを脱出し、カナンの地に向かって旅を始めた。聖書はそのところの出来事を、ワンシーン毎に、躍動的に力強く語っています。

しかし、実際に出エジプト記で語られている旅の行路は、エデンの園とは比べようもない程、荒廃した場所であり、困難が待ち構えている処であり、荒涼とした地域でもありました。食物も飲み物も思うに任せない飢餓状態、枯渇状態に置かれたのです。ところが、聖書は「その切実な祈りの場所こそが、神が民と最も親しく出会われた所だったのだ。」と語るのです。

だから、「あなた方の幸せはどこにあるのか、聖書を通して探してご覧なさい」と言われた時には、聖書の中の多くの預言者たちが告げてきた「あなた方は荒野に立ち帰りなさい。頼るべきものだった偶像を皆、かなぐり捨てなさい。自分の知識、裁量、力で何とかなると思えるような、そんなところに留まることをやめて、『自分の力ではどうにもならない神の現実の中』に立ちなさい。そここそが正に、神を神となすことができる場所であり、あなた方にとって最も幸いな場所なのだ。」というメッセージを思い出しなさいと、聖書は、私たちに告げ知らせるのです。

これは、様々な宗教団体が掲げている信仰の本質とは明らかに違いますけれど、聖書は「この“荒野”こそが、自分の力ではどうにもならない神の現実であり、その中に放り出された時、本当の神と出会える絶好の機会なのである。」と告げています。

すると、それを聞いた者の中には、そういう神との出会いを続けるためには、幸いになってはいけないし、豊かになってもいけないのではないかと、そんなことを考え出す者が現れるようになるのです。そんな者たちの考えている、味わってはならない幸いとか、豊かさとか、安穩とした生活とか、あるいは極端な言い方をすれば、皆が願い求めている平和に反するような在り方、行動というものは、唯々神との出会いを続けるために、彼らが勝手に作り上げ、勝手に描き出し、勝手に要求している、悲惨状況や残酷事態に過ぎないのだ。それは「神の荒野」でも何でもなく、無論、神は、あなた方人間との出会いの時を、そんなもので釣ろうなどとは、決して考えておられない。

聖書は、神が人間に、究極的に与えようとしておられるのは、神の御国における「朽ちることのない生命」なのだ、「破れることのない夢」なのだ、そして「失われることのない希望」なのだと告げています。

どんなに私たちが長い信仰生活を送ってきたと言っても、その終末の土壇場で「私は死を超えて生きる命を神から頂いていますから、感謝です。」ということが言い切れなかったら、私たちが信仰と称してきたことは、「地上での望みさえ適えられていれば、それでいい」というような、この世での御利益念誦でしかなかったことになるのではなからうか。

「神が時をくださっている、神がこの私の全ての土台になっていくくださる。」ということが本当に生きる支えでなかったなら、その土壇場でどんなに信仰的な表現をもって感謝が満ちているように叫んだとしても、それは本当には神を讃えていることにはならないのです。

それは、むしろ、私の都合通りのことが万事うまくいっているから、私の神は偉い神だと言っているに過ぎない。そういうことが信仰かどうか、私たちにもう一度しっかりと問い返して来る、これがまさに、この手紙なのです。（信仰の点検を迫ってくる言葉です）

先生は「私たちは神の被造物でありながら、神になろうとする。と同時に、本物の神から離れようとする（これが私たちの罪）。しかし、神は語り続けていてくださる、そして『悔い改め』を迫ってこられる（これが神の慈悲）。」と、そのことを繰り返し説教でも語られた。その都度、私は深く胸に迫り、神の憐れみとを感じさせて頂いた。

### <神の熱心・語りかけ続けられる>

先ほど申しましたように、これは離散したユダヤ人たち、ディアスポラに向かって書かれた手紙です。つまり、神を知っている“はずの”人々に向かって書かれた文書なのです。

「あなた方は神を知っていると言っているけれど、本当に神を知っているのだろうか。あなた方が知り尽くすことのできない神が、あなた方を知り尽くしていてくださるから、あなた方は自分の存在の意味を持っているのではないか。あなた方が選民であるのは、あなた方に資格があるのではなく、神がそう取り扱ってくださったからに過ぎないのではないか」ということを、やはりここでもう一度確認させたいという願いをもって、この著者は、冒頭で「神は、かつて『預言者たち』によって語られた」と告げているわけです。

ここで言われている『預言者たち』とは「モーセから始まって、最期の旧約預言者バプテスマのヨセフに至るまでの主の預言者全員」を指しています。つまり、モーセが最初の預言者だと考えられているのです。ですから、神はまずモーセに語りかけられて、エジプトで奴隷となっていた民を救わせた。神の御告げは人々を救い、人々を生かす。そのために神はまずモーセを立て、彼らを導かせた。同じように、次々と預言者を立てられ、イスラエルの民に対して神の御言を語り続けられた。それは、神の御告げを聴かせることによって、神との関係を間断なく保つためであった。

これはある意味で、私たちに対する「すごい御言の挑戦」だと思うのです。「あなた方は、まず神が語りかけてくださらなければ、神の方を振り向かないのだ」ということになるのです。そのように、絶えず間断なく、神が語り続けてくださったその歴史こそが、旧約の歴史なのです。

別の言い方をすれば、神が語りかけ続けてくださったから、彼らユダヤ人は選民であり続けられたのです。彼らがまず神の声を聴こうとしたからではない、と告げているのです。

ですから、私たちにとっても、すごい神からのチャレンジなのです。聖書を読む、毎日祈る、なんていうことを私は、自分の人生の中で欠かすことのできない大事な日課の一つとして行っているつもりでいましたが、それが実行できるのは、神が語りかけてくださっているからなのだと思われました。

そのように、確かに神は、私たちに語りかけ続けておられます。しかも、その御声を聞くことのできない状態にいる時には、神は、何としてでも聴かせようと、色々形を変えた手段を用いてでも語られました。これが、神の神たるすごいところです。

「聴かせようとして、何としてでも聴かせようとして」という「神の熱心」を、私たちはこの手紙の中で、まずしっかりと自分の心に刻んでおかねばなりません。「神の熱心」というものが、私たちをして今、神の御言を聴くことのできる状態に導いてくださっているのです。私の信仰、私自身の熱心ではありません。神の熱心、何としてでも聴かせようとされる「神の執念」なのです。

律法の中で主は「わたしは妬む神だ」とまで仰います。「執念深い神だ」とも。その「妬み、執念」というのは、正に、神が御言を聴かせて、人を生かそうとされる、とてつもない熱意なんですね。私たちを生き続けさせようと目される、神の御愛の迸りなのです。

そうした高貴な意味での執念は、私たちの周囲には全く無いのです。人間社会の中には皆無です。ですから「妬む神」という表現に対して、時に戸惑いも感じるわけです。聖書の中で、神が妬むなんていう表現を使ってよいのだろうか、神は妬たまれない、お優しい御方だから、などと言いたいのですが、神が猫なで声で耳元に「何でもいいよ、あなたなら、すべてがオッケーだから。」などと仰ったら、私たちはとっくに滅びていたのです。そういうことが「多くの仕方で」という言葉の中にぎゅっと固められている。そういう表現がここに採られているのです。

## <「終わりの時代」をめぐって>

### ②節

この終わりの時代には、御子によって私たちに語られました。神はこの御子を万物の相続者と定め、また、御子によって世界を創造されました。

「この終わりの時代には」これは、またなかなか難しい言葉です。（中略）

人間が自分の頭の中で想定して、今が終わりだとか、これで終わりだとか言っている間は、終わりは来ないのです。そういうことを勝手に口にしていう間は、神は、私たちが我儘で身勝手であることを改めよ、と迫って来られますから。

神はそういうことも悼まれながら、悲しまれながら、嘆かれながら、そんな私たちに「執念深く」悔いを迫り続けられることだろうと思うのです。

「受肉によって降臨された御子イエス・キリストは私たちのために、神との和解を通して救いの御業を完成してくださるため、十字架の上で御命を献げられ、3日目に復活を遂げられ、更に40日目に昇天なさり、50日目に天より聖霊をお送りくださった。」というのが一節の「かつて」の内容であり、「見える形にしてその御言をお示しくださった」という神の出来事です。

」



また、それが②節の「終わりの時代」と呼ばれている時代のことでもあり、その時代、これはもう神の救いの御業が、十字架というまさに究極的な形で私たちの前に具現化された時代だと言うことができます。その意味で「究極的な救いの具体的な顕示をなされた時」ということを「終わりの時代」という言葉の中に含意されているのです。

そうしますと、「この終わりの時代には、御子によって私たちに語られました」という言葉が生きて来るのです。「イエスを通して神の御言が見えるようになりました。神の御言を見せてくださいました」とも言えるのです。

しかし、イエスによっては、神の御言を見ることができない、見ようとしぬ人々もいたのです。多くのユダヤ人たちがそうでした。

彼らにはイエス・キリストが、貴い神の御子とも、待望のメシアであるとも感じられず、信じられなかったのです。それは、彼らが彼らなりのメシア像を堅持していたからです。自分たちが描くメシア像に合わないから、イエスはメシアではないと言い放ったのです。こうして、またしても、人の思いが達成されることが大事であって、神の思いに従うことが優先ではないという考え方が「ユダヤ教の選民思想」に見られたのです。

<「悔い改めよ」・1995年はどのような意味をもっているか>

一般的な社会の常識的な判断からいえば、昨年の1995年と言うのは大変暗い年でした。「三陸遙か沖地震」から始まって「神戸・淡路を中心としたあの激しい地震」があって「オウムの問題」があって、あれがあって、これがあって、「住専問題」が出てきて、だから暗い時代だった、そう総括することもできるんですね。

しかし、私にとって1995年とは何であったかということ、やはり神が支配して下さった一年間であった。その点においては暗いか、辛いとか、悲しいとかということよりも、神の御支配をあらゆる形で見えなくさせようとしている現実の力が、すごく働いた年だった。人間の罪が、本当に吹き出してきた一年だったと思うのです。

ヨハネが福音書に書いてあります「神の光に照らされてすべての隠れたものがあらわになった」というのは、まさにそういうことなのです。だから、私にとっては神の力、神の働き、神の時が、力をもって迫って来られた時なのだと感じる事ができ、そのような聖書的視野に立ってものを見ると、隠されていた暗いこと、辛いこと、嫌なことが、沢山、顕わにされました。

逆に言えば、私たちの罪がそんなに深い、そんな悲惨状況だということを神が明らかにされ、多くの人々の心の闇に光をふり注ぎ、導きを与え、悔い改めるようにと勧められた一年であった。そう覚えてよいだろうと思うのです。

<「わたしに、より頼みなさい」「神の言葉に生とは」>

私は最初にお断りしましたように、「ヘブライ人への手紙」というのは、信仰を持っていると考えている人々に向かって語っているわけですから、ノンクリスチャンに向かって語っているわけではないのです。

そういう意味では、救われたと信じている人々に向かって語っているわけですから、「救われたことは、決してあなたが完璧になったからとか、立派になったとかいうことではないのだ。わたしが救わなければどうしようもなかったから救ったのだ。だから、あなた方は、今日から自分を頼りにするのではなくて、わたしの言葉を頼りにして生きなさい。どっちが東か、どっちが西かわからない荒野に立たされたあなたたちは、わたしが備えてあげる雲の柱、火の柱に導かれて、その方向に進みなさい。それしか進路はないのだから」という形でイスラエルの民を導かれたのが、あの出エジプトの出来事、荒野での主との出会いでありました。

そこでは彼らは、その神に頼るしか、自分たちの生きる道はなかった。勝手な方角には進めなかった。だからこそ、神は、彼らをカナンの地まで守り導いてくださったとなるわけです。

約束の神の国に私たちが導かれるのは、神が私たちに先立って歩んでくださっている証しの雲の柱、火の柱をしっかりと見つめて、その方角に進んでいだけなのです。「頑張る」というのは、唯「それを見失わないように頑張る、その歩みに遅れないように頑張る」ことで、神の導きに身を委ねてお従いすることが、要するに、神の御言、御心に従って生きることなのです。

## ② 節をもう一度参照しましょう。

この終わりの時代には、御子によって私たちに語られました。神はこの御子を万物の相続者と定め、また、御子によって世界を創造されました。

終わりの時代には、「御子イエスによって語ってくださった。イエスが私たちに神の恵み、救いを明らかにしてくださった」と、この文章は私たちに告げます。

イエスという御方はどういう御方か、ということをごここで少し書いています。これはまた後で学んでいく中で出てまいりますから、あまり細かくは申しませんけれど、まずここでイエスという御方は「万物の創造者」であったとありますね。即ち、神と主イエス・キリストが一つであることをこういう形で表現しました。

イエス・キリストは「万物の創造者」であり、全世界をお創りになった御方です。神の子だから、神に創造されて、生まれて来られたのだと、この手紙は私たちに告げていません。イエスは既に、私たちより先にいまし給うた「神と共においでになった御方」とあります。

## ③節前半

御子は、神の栄光の反映であり、神の本質の完全な現れであって、万物をご自分の力ある言葉によって支えておられます。

御子イエスは、神の御光を、そして神の御力を、余すところなく身に帯びていらっしゃって、それを充分に行使することのできる御方であり、その御方によって初めてすべてのものは今、支えられているのです。そういう御方ですね、主イエスは。相続者であり、それを担ってくださる保持者であられる、そのようにここでは語っています。

### ③節後半、

人々の罪を清められた後、天の高いところにおられる大いなる方の右の座にお着きになりました。

この文章は、今日の私たちの教会が与っている信仰告白とほぼ同じです。

御子は神の御独り子であられ、神と全く同質の御方です、にも拘わらず、主はこの世に降っておいでになり、100%神であられると同時に、100%人ともなられ、全き救いの御業を完成なさって、甦られ、天に昇られ、今や、天の玉座に在す御方です。ですから、「かしこより来たり給う主を、私たちは信じて待ちます」という信仰の告白がここには出て来るわけです。私たちはこのイエス・キリストが降誕なされたクリスマスを祝います。

しかも、その御方が異邦人の主であった。神を知らない者をも含めて救い主となったださる御方であられたということ、その異邦人である私たちは、マタイによる福音書の第2章を通して教えられています。「異邦人が主を礼拝するということを容認します。」と、主イエスが異邦人の主となったださったとことを、教会の暦の中では『エピファニー』とか『顕現』とか『栄光』とか『公現』とかいう言葉で呼んで、讃えています。

今年は日本のテレビも教会に対して関心を払ってくれました。NHKが毎年報道して下さる「行く年来る年」の除夜の鐘。いつもお寺の鐘ばかり聞かせてくださったのですけれど、今年はそうではなかったのです。

ベツレヘムの町のクリスマス、それから震災で焼け落ちた関西のカトリック教会でのミサも「行く年来る年」の中でちゃんと放映して下さった。そういう中で教会というものの年を越していくのだということを伝えてくれました。

更に、1月7日の夜、やはりNHKの報道の中で東方教会、正教会が紹介され、「正教会＝オーソドックスチャーチは1月7日の今日がクリスマスなのです」という話をしてくださったのです

それは、彼らは自分たちは異邦の民であるということを知っているということです。異邦の民の救い主であることが明確になった日が、エピファニー。太陰暦では1月6日の夜から始まる1月7日なのです。

私はこの東方教会の日付がどうのこうのという問題ではなく、「神が私たちを憐れみ、顧みてくださった証がそこにある。イエスの降誕は、正にそうだった、という形で受けとめている東方教会の姿勢」は、非常に大事な姿勢だと思ったのです。

イエスは先ずユダヤ人の王としてお生まれになった。しかし、そのユダヤ人の王としてお生まれになった御方を、自分の救い主としても受け入れた東の博士は、はるばる訪ねて行き礼拝を捧げることによって、自分たち異邦人の王＝メシアと成した。その日、そのことによって、主イエスもメシアとなってくださった。

だから、異邦人の私たちも、この御方を救い主として受け入れるのだ、この御方が私たちの礼拝を受け入れてくださったから、救いはそこで成り立ったのだという考え方はすごく興味深い考え方であり、大切な考え方ではないかと思うのです。そのようにしてクリスマスは、日本でも盛んに祝われるようになっていきました。

それと同時に、今度はイエスは十字架にお架かりになるまでの日、これには「初代教会から、すべての教会が守っている大切な『受難週』があり、『十字架の日＝受苦日』があり、それから3日目の『復活の日』がある」。そして復活されたイエスを皆が本当にお祝いして、イースターを讃えるのです。

東方教会ではなく今度は西方のカトリック教会は、このイースターに向かったの期間を「イエスさまの受苦」ということを問題にしようとする事から「聖灰水曜日」をきちんと守っているのです。その水曜日の朝は早くからミサに行き、ミサに参列した方々が、その前の年に教会に献げた棕櫚の日曜日の棕櫚の葉の枝を燃やして、その燃やした灰で、おでこに十字架を書いてもらってから、お勤めに出て行くのです。

「私たちは主の十字架によって贖われた者であって、十字架なしには死ぬべき存在でした」ということを表明するために、おでこに十字架を書いたものを一日中消さないでおくわけですよ。そしてその日の夜、晩禱に出席して、もう一度主の前に救いを感謝する、ということをおこなってられるのです。

#### <松山先生から私たちへの勧告>

私には「教会が教会歴を守って、礼拝を続けてゆくこと」が非常に大事なのです。というのは、神が、歴史を先導していらっしゃるのだから「神が私たちに対して、事を起こされたときに、それを素直に受けとめていく必要がある」と思うからです。「神がこの日、私に対して、これこれを為してくださったということ、しっかり受けとめる習慣を続けていけば、毎日毎日、神が私に何をしてくださったかを受けとめる可能になるのではないか」そのように思うと、何をあいても、私は昇天日の礼拝とか、昇天日の記念集会とかを、夫々の教会でお持ちになった方がいいのではないか、と思うのです。

そうすると、主が昇天された時に天の使いが告げて言った「あなたがたが見ているように、主はまたおいでになる」という言葉が、その場で生き生きと私たちのものとなり、「再臨信仰」が、私たちの中に養われてゆくわけです。

そして、私たちが主を見上げていたように、主はまた、主に目を注ぐ私たちの前においでくださるということは、「私たちが主に目を注いでいなければ、おいでになるのは見えない」ということでもあるのです。

ところで、当時のユダヤ人たちは「守護天使」という存在を信じていました。あのヤコブを守った天使、あるいはイサクを守った天使がそれぞれいた、と信じていましたから、旧約では諸天使という言葉がよく出てくるわけです。

その、あなた方を地上で守ってくださる諸天使よりも、もっと上の位にいらっしゃる上級天使、更にそれを遥かに超えられた神様としてのイエスがおいでになるということで、「身近かなところで罪を癒されたり、悲しみを慰められたりするだけでなく、もっと深いところで、神様に心の奥底まで新たにされるのが、最も大切なことですよ」と、常日頃、私は語らせて頂いております。

#### 第④節

御子は天使たちより優れたものとなりました。天使たちの名より優れた名を受け継がれたからです。

そういうユダヤ人たちの習慣とか慣習というものを使いながら、そのすべてを超えて、「イエスをキリストとする」ということの意味がそこにあるのだ。と手紙の著者は告げているのです。

「イエスをキリストとする」ということは、「イエスが私たちの創造者であり、担い手であり、贖い主であり、そしてまた、裁き主であられることを受諾すること」なのです。だからこそ、『この御方の御言』に全身全霊をもって聴き従いましょう、『その御方の指し示される指の先』に全身全霊をかけて従って行きましょう、という呼びかけが、この手紙の中でなされているのです。裏返して言えば、そういう「聖書信仰」の基が、非常に簡潔に「神は御子によって語られました」という言葉で①節から④節までに記されているのです。

これは、序論であると同時に、ある意味、信仰生活の総論として示されているのです。私たちはそういう信仰に立って、聖書を受けとめ、そういう信仰に立って、歩みを進め、そういう信仰に立って、学んでいきましょう、という覚悟がここで確認されています。

1996年1月13日

次ページから、日本基督教団峡南教会森容子先生の説教です。

この前段5：1-11で筆者パウロは「信仰者は、苦難から忍耐へと進み、忍耐から品格を養い、その品格は、神との和解、神の子としての栄光に与る希望に繋がる」と教授しました。この五つの単語は、世間的な用語でなく、夫々が神様の御愛と深い御心に関わる深い意味を擁しています。また、私たち人類が目指し続ける神との和解は、神様からの一方的な働きかけであられ、神様が、私たちの見解を変えられ、神様の方へ向き直され、御心に適うようお導きくださるとのこと、**「神を誇りとする」**とは、そういうことであると教えられました。

それらを踏まえて、今回のテキストに入りましょう。

12 このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、すべての人に死が及んだのです。すべての人が罪を犯したからです。

冒頭の「このようなわけで」の「わけ」に相応しい説明を求め、前段を熟読し思いを巡らしましたが、やはり創世記2～3章に記される、アダムとエバが、神様に対して冒した原罪と称される罪の出来事、その罪が全人類にもたらした「死の定め」を、ここで捉え直す必要があると考えました。

まず、出来事の筋を追いますと、エデンのアダムは神様から**「ただ、善悪の知識の木からは、取って食べてはいけない。取って食べると必ず死ぬことになる。」**という厳命を受け、妻エバにも伝えましたが、**「賢くなるというその木は好ましく思われた。彼女は実を取って食べ、一緒にいた夫にも与えた。」**というあるまじき罪を二人は冒してしまい、それゆえ、神様より**「土から取られたあなたは土に帰るまで 額に汗して糧を得る。あなたは塵だから、塵に帰る。」**という、苦役と「死の定め」が課せられたのです。

そして、その「死の定め」は、アダムの子孫であるすべての人類に及ぶこととなりました。更にもっと厳しいと思えるのは**「すべての人が罪を犯したからです。」**と、パウロが「全人類の共犯」を宣言していることです。それは、アダムたちが神様の禁を破り**「善悪の知識の木の実」**を食べてしまった過ちは、人類全てが冒した罪であると、神様に認定されたという意味です。

かつての私は、その創世記の記事がある意味、不思議でなりませんでした。神様がアダムたちに「その実を取って食べるは厳禁」とされた**「善悪の知識の木」**を、なぜに神様は、簡単に彼らの手が届く所に植えておられたのか、そして、蛇がエバを唆してその実に手を伸ばすよう仕向けた際、なぜに神様は、エバの傍らにいたはずのアダムを促されて、エバを阻止なさらなかったのか、ということです。それを考えれば考えるほど、彼らが、神の戒めに逆らう罪へと転落するきっかけ、ないしは、その筋書きを作られたのは、他ならぬ神御自身であられるに相違ない、と思えてきたのです。

しかし、それは神様の創作ゲームなどでは決してなく、アダムの内に既に孕んでいた「自分は神と同じ立ち位置に在りたい」という強欲、傲慢、そして「エバを犠牲にしてでも、神の御言の真偽を確かめたい」という妻への無慈悲、残酷、神への疑念、不従順を炙り出し、それらを神の御前に晒すためであられたことにも気づきました。

もしそうであれば、神様は、心中に飼っていた罪を露わにされたアダムや、誘惑に負けてしまったエバたちのその後に、何を期待されておられたのでしょうか？ ・ ・ ひたすら神様に赦しを乞い願う二人の、号泣でしょうか、アダムが、神様と妻と自分自身に対して冒してしまった三つの重罪への、著しい悔い改めでしょうか。しかし、アダムにもエバにも蛇にも、そうした号泣も、悔い改めも、一切何もありませんでした。唯、彼らは神様に怯えていただけでありました。

ですから神様は、その赦し難きアダムらの罪責を、今度は神の被造物なる全人類に背負わせ、アダムの罪に始まる死を彼らにも及ばせ、その死の暗く重い受苦を通して、いつか、神様の期待通りの筋書きを完成したいと願っておられたのかもしれませんが。 ・ ・ しかし待てど暮らせど、「始祖アダムたちの罪の責任を、この私が全身全霊で担いますから、どうか人類をお赦しください」と、神の御前に真から憐れみを乞う人間は、現れ出てまいません。そこに満を持して、神の御子イエス・キリストが名乗り出られたのです。

**13-14 確かに、律法が与えられる前にも罪は世にあったが、律法がなければ、罪は罪と認められません。しかし、アダムからモーセまでの間にも、アダムの違犯と同じような罪を犯さなかった人の上にさえ、死は支配しました。このアダムは来るべき方の雛形です。**

「**律法が与えられる前にも罪は世にあった**」とありますが、エデンの園で、「**ただ、善悪の知識の木からは、取って食べてはいけない。**」との戒めを神様が与えられたのは、罪を罪と認定するための「**律法の予型**」だったと言えるのではないのでしょうか。

そして「**このアダムは来るべき方の雛形**」とは、アダムが過ちと死の象徴であり、そして、来るべき御方イエス・キリストが恵みと義の象徴であられ、前者があってこそ、後者への結実という意味合いで、パウロはアダムをイエス様の雛形と言っているのではないのでしょうか。

**15 しかし、恵みの賜物は過ちの場合とは異なります。一人の過ちによって多くの人が死ぬことになったとすれば、なおさら、神の恵みと一人の人イエス・キリストの恵みによる賜物とは、多くの人に満ち溢れたのです。**

しかし「**雛形**」と綺麗に申しましても、イエス・キリストの恵みと義は、アダムの過ちと死とは全く相反し、アダムの過ちのために「死」の恐怖と苦痛がもたらされた事実には変わりはありません。

この死の受苦の効力を制限するため、御父、御子なる神様は、御子の十字架の贖いという、人類への究極の賜物を御決意されたと考えます。その賜物は、御子の贖いを信じる人々には、彼らが負ねばならぬとされたアダムの罪責の死を免除し、代わって、御国での

永遠の命を保障される恵みと義です。この死の恐怖と苦しみを取り除くための賜物は、この地上の多くの人々の上に満ち溢れました。

(ここでは初めからキリスト者に限定せず、パウロは「多くの人々」としていますね。)

16 この賜物は、一人の犯した罪の結果とは異なります。裁きの場合は、一つの過ちであっても、罪に定められますが、恵みの場合は、多くの過ちがあっても、義と認められるからです。

この節の「恵みの場合は、多くの過ちがあっても、義と認められる」というフレーズが分かり難いですね。ギリシャ語原典を参照すると、「恵みの賜物は、多くの違反から義を生み出す行為をもたらす」となっています。この「行為」は人間側に要求される行為でなく、恵みの神様が、多くの違反を繰り返した罪人さえ義と認められる道を備えられた、真に貴い御行為です。

このことを覚えるために、ロマ書3：23-26を味わいましょう。

「人は皆、罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっていますが、キリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより価なしに義とされるのです。神はこのイエスを、真実による、またその血による贖いの座とされました。それは、これまでに犯されてきた罪を見逃して、ご自身の義を示すため、すなわち、御自身が義となり、イエスの真実に基づく者を義とするためでした。」

ここは、何度読み返しても、計り知れない主の贖いによる義の授与に感動し、胸が熱くなります。それと共に、神様に対して冒し続けてきた人類の罪を見逃されるという、圧倒的な神御自身の義を示されるため、イエス様の真実に基づく者を義とされるという、私たちに課せられた信仰義認もすべては神様の御恵みの賜物であられることを、改めて知るに至りました。

17-18 一人の過ちによって、その一人を通して死が支配するようになったとすれば、なおさら、神の恵みと義の賜物とを豊かに受けている人たちは、一人の人イエス・キリストを通して、命にあって支配するでしょう。そこで、一人の過ちによってすべての人が罪に定められたように、一人の正しい行為によって、すべての人が義とされて命を得ることになったのです。

ここでは、アダムの過ちによってもたらされた、人類すべてへの暗黒の死の支配に対して、主イエス・キリストの正しい行いによってもたらされた御恵みと義の賜物をお受けしたすべての人々が、「天の御国における輝かしい永遠の命のご支配に与る」と、パウロは宣言しています。

この賜物の授与は、イエス様の真実に基づく者と志すか否か（イエスかノーかの二択）にかかっており、それは私たちに向かって絶えず問い迫られ、そこに、必ず働きかけいてくださる聖霊の御導きにお従いする他に、道はありません。



19-20 一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたように、一人の従順によって多くの人が正しい者とされるのです。律法が入り込んで来たのは、過ちが増し加わるためでした。しかし、罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ち溢れました。

ここでもう一度、始祖アダムの神への不従順が及ぼした、全人類が背負い続ける死の報い、それに対して、天より降臨された御子イエス様の御父への従順が及ぼされた、多くの信仰者が義しい者とされる義の御業が確認されています。こういう理解の確認行為は、教師パウロの几帳面さであられるとも存じます。

そして、それに続いて、神様がモーセを通して与えられた律法の役目が論じられ、「**律法が入り込んで来たのは、過ちが増し加わるためでした。**」と、パウロは告げています。

確かに律法がなければ、罪・過ち・咎などの概念もありませんでしたが、律法が与えられたため、過ちという判定が増し加わったと言うのです。ですが、律法の故に、過ちを犯す人間が増えた、ということではありません。お間違いのないように。

また、「**罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ち溢れ**」というフレーズもやや分かり難いですね。簡単に言えば、人類夫々の数えきれない罪責の火消し役が、主イエス様のまさに圧倒的な御恵みであられたということでありましょう。北風と太陽のように、罪に罰という単純構造では人は変わりません。罪人に、ありえないような主の御赦しや憐れみの恵みを賜われれば、素なる心となって反省し悔い改め、跪いて感謝するというような全うな姿勢に繋がってゆくことでしょう。これが理想的な神様と人間との関係ですね。

21 **こうして、罪が死によって支配していたように、恵みも義によって支配し、私たちの主イエス・キリストを通して永遠の命へと導くのです。**

ここまでのメッセージを、パウロはとても簡潔に爽やかにまとめています。中でも最後に置かれた「**私たちの主イエス・キリストを通して永遠の命へと導くのです。**」というのは、何と力強いメッセージで、「私たちの究極の希望の実現がここにあり、ああ、幸いなるかな～」の溜息が出てまいります。

殊に、その終末における福音をまだご存じでなかった手紙の読者には、驚くべきメッセージであると、目を丸くされたことでありましょう。

最後に、榊原康夫先生が著された『ロマ書講解 IV』において、今日のテキストのまとめとされた、先生らしいメッセージをご紹介します。

わたくしたちひとりびとりの「希望」は、わたくしたちひとりびとりがどれほど信仰を篤くし、わたくしたちがどれほど善き業をし、どれだけわたくしたちが罪を償いましたか、ということにかかっているのではない。わたくしたちの「希望」は、原罪のある性質がどれだけ聖化されているかということにかかっているのではない。

そうではなくて、キリスト者の「希望」は、契約の代表者、「最後のアダム」と呼ばれるイエス様にかかっている。 わたくしたちがそのイエス様につながってさえすれば、われわれの「希望」は確かであります。神に対する「平和」も確かであります。

したがって、わたくしたちは「喜べる」のであります。 (心からアーメン、です)

しばし、貴き贖い主、最後のアダムを仰いで、黙禱をお献げ致しましょう。

### <写者あとがき>

第1回目はプロローグですが、ある意味で、信仰生活の総論が記されていると同時に新旧約聖書の重要で基礎的な概念についても述べられています。ヘブライ人への手紙は、ユダヤ教の歴史と伝統の中で育った人々を対象にしているために、神の先在性等、神に対する旧約的基礎知識を持った人々に対して書かれています。それらの人々は、激しい迫害を乗り越えてキリスト者になりましたが、彼らが期待した再臨がすぐには来なかったので、復活信仰が揺れ動いてきていました。

この状況は現代も変わりません。現代は世俗化のスピードが激しく、聖なるもの、義なるものへの感覚が麻痺して、ときに良心さえ失っています。洗礼を受けた者も、生涯を通して信仰を養うことに困難を覚えている者が少なくありません。

松山先生は、特に1995年の出来事を取り上げられて、見つめられ、「人間の罪が本当に噴出した1年である。神のご支配を、あらゆる形で見えなくさせようとする現実の力がすごく働いた年だった。」と記されています。それから30年、その力はますます強くなっています。自然界、人間界とも、調和、平安を失っています。

このような時代に「ヘブライ人への手紙」に学ぶことその教えに真摯に耳を傾けることは、すこぶる重要な意味を持つのではないだろうか、と思います。

神は被造物に対して過去から今まで、そしてこれからも、絶えず語り続けてくださいます。人々の耳が頑なになって拒んでも、なんとかして聞かせようとする神の熱心を、聖書の中に読み取ることができます。神のあまりにも熱心が「執念」ともなること、それを別の角度から見ると「妬む神」となれることを、松山先生は丁寧に紐解いてくださいました。神の執念とは何か？ それは「神を拒む人間を滅ぼさないでおこうと、極限まで忍耐される執念だ」という、とても興味深い語りがありました。

神は常に呼びかけてくださっている。神の呼びかけによって世が成った。ヨハネによる福音書の冒頭を思い出します。応答関係を揺るぎないものとする啓示宗教としてのキリスト教を、日本の実情と照らし合わせて記して下さっている、とても興味深い語りかけがあります。

「あなたはいかなる像もつくってはならない」は十戒の第二戒ですが、「私たちは自分

の都合のよい自分勝手な神をつくっている。自分に都合のよい聖書の読み方をしている。」と松山幸生先生は、しばしば警告をされました。

今一つ強く警告されたことは「自分の知識、裁量、力でなんとかしようとする。なんともならないことを、なんとなかったように自分に錯覚させてしまう。」と、自分の力を過信ないし錯覚することへの厳しい指摘であられました。この第1回の文脈では「荒野に立ち帰れ」と言われています。そして「悔い改めよ」と勧告されています。

また「あなた方は神を知っていると言っているけれど、本当に神を知っているのだろうか？」と真摯に問われます。「神が、時をくださっている、神がこの私の生活の全ての土台になってくださる。」と本当に言えているだろうか、と。更に「神を讃美することとは具体的にはどういうことか？」ハイデルベルグ信仰問答の第1問を「まえがき」で引用されましたが、ここでは「死を超えて生きる命を、神から頂いていますから、感謝です」と、裁きの土壇場で言い切ることだと言われています。

3年前（2021年8月11日）に「ヘブライ人への手紙に学ぶ」の写書を始めました。その目的は「私の信仰の立て直し」にありました。ですが、第1回目の写書の「あとがき」を書くことができませんでした。松山先生の講述に打ちのめされ、言葉が出て来なかったのです。

今回もここまで書けたことが不思議です。導いてくださった主に御礼を申し上げる次第です。第2回目の今回は、全編にわたり森容子先生に説教をお願いしました。自分の信仰が養われ、そして、これを読んでくださる皆様の信仰が養われるために、松山先生の講述32回の改訂を全力でやり抜きたい、それが神様の御心に適っていますことを祈りつつ。

2024年8月11日 小原靖夫